14　次の文章は『』の一話「耳売りたる事」である。これを読んで、後の設問に答えよ。 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈東京大〉二〇二三年度出題

　南都に、ある寺の僧、耳のびく厚きを、あるなる僧ありて、「アたべ。の耳買はん」とふ。「とく買ひ給へ」と云ふ。「いかほどに買ひ給はん」と云ふ。「五百に買はん」と云ふ。「さらば」とて、を取りて売りつ。その、京へりて、のもとに、耳売りたる僧と同じく行く。相して云はく、「おはしまさず」と云ふ時に、耳買ひたる僧の云はく、「あの御坊の耳、そのかくのごとき数にて買ひふ」と云ふ。「さては御耳にして、明年の春のころより、御福分かなひて、御心安からん」と相す。さて、耳売りたる僧をば、「イ耳ばかりこそおはすれ、そのは見えず」と云ふ。かの僧、当時までの人なり。「かく耳売る事もあれば、を売ることもありぬべし」と思ひ、南都を立ち出でて、の方に住みりけるが、にて、説法などもする僧なり。

　あるの云はく、「老僧を仏事にずる事あり。身老いて道遠し。ウ予に代はりて、赴き給へかし。ただしなり。想像するに、十五には過ぐべからず。またこれよりなる所に、ある神主のなるが、七日をする事あり。これも予をすといへども行かんことを欲せず。これは、一日にならば五貫、ようせば十貫づつはせんずらん。、いづれに行き給はん」と云ふ。かの僧、「すまでもなし。遠路をぎて、十五貫文など取り候はんより、一日路行きて七十貫こそ取り候はめ」と云ふ。「しからば」とて、一所へはをして行かしむ。神主のもとへはこの僧行きけり。

　既に海を渡りて、そのに至りぬ。神主はに及びて、病床にしたり。子息申しけるは、「老体の上、日久しくして、安泰頼み難く候へども、もしやと、づに、のありたく候ふ」と申す。「また、逆修は、いかさま用意り候ひて、やがてひきつぎ仕り候はん」と云ふ。この僧思ふやう、「先づ大般若の取るべし。また逆修の布施は置き物」と思ひて、「安きことにて候ふ。参るほどにては、仰せに従ふべし。エれも得たる事なり。に祈禱はが宗の秘法なり。必ず霊験あるべし」と云ふ。

　「さて、酒はきこしめすや」と申す。大方はよきにてはあれども、「酒を愛すと云ふは、薄からん」と思ひて、「いかにもげなるならん」と思ひて、「オ一滴も飲まず」と云ふ。「しからば」とて、温かなるをめけり。よりて、大般若経のして、かの餅を食はしめて、「これは大般若の、不死の薬にて候ふ」とて、に与へけり。病者貴く思ひて、しながらして、の御恵みと信じて、一口に食ひけるほどに、日ごろの故、疲れたるにて、食ひ損じて、むせけり。女房、子供、抱へて、とかくしけれども、かなはずして、息絶えにければ、カ中々とかく申すばかりなくして、「の時こそ、を申さめ」とて返しけり。

　帰るにて、風波荒くして、浪をぎ、やうやう命助かり、損失す。また今一所の経営は、布施、なりける。これも、耳の福売りたるかと覚えたり。万事する上、キ心も卑しくなりにけり。

〔注〕　○耳のびく―耳たぶ。

○五百文―「文」は通貨単位。千文が銭一貫（一貫文）に相当する。

○相者―人相見。

○世間不階―暮らし向きがよくないこと。

○逆修―生前に死後の冥福を祈る仏事を修すること。

○無下―最悪。

○八旬―八十。

○不例―病気。

○真読の大般若―『大般若経』六百巻を省略せずにすること。

○置き物―ここでは、手に入ったも同然なことをいう。

○啓白―法会の趣旨や願意を仏に申し上げること。

○法味―仏法の妙味。

○孝養―亡き親の追善供養。

問１　傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

問２　「何れも得たる事なり」（傍線部エ）について、「何れも」の中身がわかるように現代語訳せよ。

問３　僧が「一滴も飲まず」（傍線部オ）と言ったのはなぜか、説明せよ。

◎問４　「中々とかく申すばかりなくして」（傍線部カ）について、状況がわかるように現代語訳せよ。

問５　「心も卑しくなりにけり」（傍線部キ）とはどういうことか、具体的に説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝Ａください。Ｂあなたの耳を買おう

Ａ＝５〔「たべ」の訳は必須。〕

Ｂ＝５〔「あなたの～」の訳は必須。「～う・よう」など意志の「ん」の訳出がなければ減点２。〕

イ＝Ａ耳だけは幸福の相がおありだが、Ｂそのほかには福相が見えない。

Ａ＝５〔「のみ」「だけ」など副助詞「ばかり」の訳出がなければ減点２。「が」「だが」など係助詞「こそ」の訳出がなければ減点２。「おはす」を尊敬で訳出していないものは減点１。〕

Ｂ＝５〔「そのほか」以降の訳は必須。〕

ウ＝私に代わって、お出向きになりなさいよ。

尊敬語の訳出がなければ減点２。「よ」「な」など終助詞「かし」の訳出がなければ減点２。

問２　Ａ大般若経の読誦も、Ｂ死後の冥福を祈る祈禱もＣ得意なことだ。

Ａ・Ｂがともになければ全体０。

Ａ＝３〔「大般若経を読むこと」が必須。〕

Ｂ＝３〔「逆修祈禱」を言い換えていることが必須。〕

Ｃ＝４〔「得たる」を「得意」と訳せていることが必須。〕

問３　Ａ尊さを守るために、Ｂ酒好きで信仰が薄いと思われるとＣ不都合だから。

Ａ＝４〔「高僧のように振る舞うため」など同内容可。〕

Ｂ＝３〔実際には酒好きであるという内容が必要。〕

Ｃ＝３〔同内容可。〕

［別解］酒好きで信仰が薄いと思われると、布施に影響するかもしれないから。

問４　Ａ僧が与えた餅で神主が亡くなり、Ｂ家族はＣかえってあれこれ申すこともなくて、

Ａ＝３〔同内容可。状況の説明が必須。〕

Ｂ＝２〔主語が必須。〕

Ｃ＝５〔この部分の訳出は必須。〕

問５　Ａ僧が生活苦になったうえにＢお金に執着するＣ下劣な心を持つこと。

Ａ＝３〔状況の説明が必須。〕

Ｂ＝４〔「金銭への執着」にあたる内容が必須。〕

Ｃ＝３〔「心」の説明がしてあることが必須。〕

【現代語訳】

　奈良の都に、ある寺の僧で、耳たぶが分厚いのを、ある貧乏な僧がいて、「問１アください。あなたの耳を買おう」と言う。「早くお買いください」と言う。「どのくらいでお買いになりますか」と言う。「五百文で買おう」と言う。「それならば」と言って、金を取って売った。その後、（耳を買った僧は）京都へ上って、のところに、耳を売った僧と一緒に行く。（耳を買った僧の）人相を見て言うには、「幸福の相がおありにならない」と言う時に、耳を買った僧が言うには、「あのお坊の耳ですが、その代金をこのような値段にて買いました」と言う。（人相見は）「ではお耳のおかげで、来年の春頃から、福分が豊かになり、お気持ちも平穏だろう」と判断した。さて、（人相見は）耳を売った僧を、「問１イ耳だけは幸福の相がおありだが、そのほかには福相が見えない」と言う。この（耳を売った）僧は、その頃まで暮らし向きがよくない人である。「このように耳を売ることもあれば、貧乏困窮を売ることもきっとあるだろう」と思い、奈良の都を立ち出でて、東の方に住んでいましたが、学問専門の僧で、説教などもする僧である。

　ある上人が言うには、「私を仏事に招くことがある。（しかし）この身は老いて道は遠い。問１ウ私に代わって、お出向きになりなさいよ。ただし三日かかる道である。想像するに、お礼は十五貫文は超えないだろう。またここから一日の道である所に、ある神主で徳の高い人が（いて）、七日間死後の冥福を祈る仏事を修することがある。これも私を招いているが行きたくない。こちらは、一日に最悪でも五貫、よくすると十貫ずつはもらえるだろう。あなたは、どちらにお行きなさる」と言う。この（耳を売った）僧は、「申し上げるまでもない。遠い道をしのんで行って、十五貫文などを取りますより、一日の道を行って七十貫文を取ります」と言う。「それならば」と言って、一方へは別の人を行かせた。神主のところへはこの僧が行った。

　すでに海を渡って、その場所に至った。神主は年齢八十に及んで、病床に伏している。子息が申し上げたことには、「老齢のうえ、病気の日も長くて、安泰を願うのは難しいのですが、ひょっとするとと（思って）、まず祈禱として、大般若経を省略せずに読誦していただけるとありがたいです」と申し上げる。「また、逆修の祈禱は、（私どもで）ぜひとも用意申し上げまして、そのまま（祈禱に）引き継ぎ申し上げます」と言う。この僧が思うには、「まず大般若経のお礼をもらおう。また逆修の（仏事の）お礼は手に入ったも同然」と思って、「簡単なことです。参上した以上、おっしゃることに従いましょう。  
問２エ大般若経の読誦も、死後の冥福を祈る祈禱も得意なことだ。特に祈禱は私の宗派の秘法である。必ずご利益があるでしょう」と言う。

　「ところで、お酒は召し上がるか」と（神主の家族が）申し上げる。（僧は）実際にはとても酒好きなのだが、「酒が好きだと言うと、信仰が薄い（と思われる）だろう」と思って、「（そう答えるのが）いかにも尊い様子だろう」と思って、「一滴も飲まない」と言う。「それならば」と言って、（家族は）温かい餅を勧めた。（僧はこれに）よって、大般若経の（祈禱の）趣旨を仏に申し上げて、この餅を食べさせて、「これは大般若経の仏法の妙味、不死の薬です」と言って、病人（＝神主）に与えた。病人は尊く思って、寝ながら手を合わせて、（仏法僧の）三宝神々のお恵みと信じて、一口に食べたところ、日頃食事をしていなかったため、疲れていた様子で、食べそこなって、むせた。女房、子供が、抱えて、あれこれしたが、かなわずして、（神主が）死んでしまったので、（家族は）問４かえってあれこれ申すこともなくて、「追善供養の時に、ご連絡します」と言って（僧を）帰した。

　帰る途中で、波風が荒くて、船は波を押し分けて進み、ほうほうのていで命が助かり、衣装をはじめとして（持ち物を）失った。またもう一方の依頼の法事は、お礼の額が、とても多かった。これも、耳の徳を売ったせいかと思われた。万事がうまくかみあわないうえ、心根も貧しくなったのだった。